

学習まんがにみる日本の戦争 ーいま良書を選ぶ必要性ー

饗場和彦・徳島大学大学院社会産業理工学研究部

はじめに

「君ら、こんなことも知らんのか」と喉まで出かかるとを何とか飲み込む。大学の授業でアジア・太平洋戦争にふれると、学生の知識のうすさに驚くことがある。広島・長崎の原爆や沖縄戦などはある程度、頭にあるようだ。だが「従軍慰安婦を知っているか」と訊くと手を挙げるのは 3、4 割、「南京虐殺は」と問うと 2 割ほど、「731 部隊は」となると数名、平頂山事件やバターン死の行進にいたっては誰も知らない。

こうした戦争の加害性を知らない傾向は、教科書による影響が大きい。1990 年代から広がった歴史修正主義の中で、教科書も変化し、日本軍の加害の記述が大幅に減った¹。ただ、教科書以外にも児童・生徒らに影響を与えうる媒体として、学習まんががある。ほとんどの学校の図書室や公立図書館では何らかのシリーズがそろっている。とくに、2010 年代から学習まんがの新刊が相次ぎ、売れ行きもよいという。児童・生徒らが学習まんがに接する機会が多いなら、その影響も小さくないだろう。

では、そこでは日本の戦争はどのように伝えられているのか、それによって戦争や平和をめぐる知識・考え方に影響がありうるのだろうか。本稿では、各社の日本史の学習まんが 10 種について、主にアジア・太平洋戦争に関する描写に注目して概観し、検証する。

1 『小学館版学習まんが 少年少女日本の歴史』（小学館、1981 年～）

1981 年から 20 巻＋別巻 2 巻として刊行が始まり、1998 年に増補改訂し 21 巻＋別巻 2 巻に、2018 年には『平成の 30 年』を追加して、現在 22 巻＋別巻 2 巻となっている。第 1 巻の通算 103 刷を筆頭に各巻とも増刷を重ねるロングセラー。情報量の多さ、加害と被害の両面のバランス、平和志向と戦争批判の明確性、市民目線の重視、素朴で写実的な画風（ただ最新の 22 巻はまんが作家が違うため画風に違和感がある）などに特徴がある。

被害の面ではとくに沖縄戦が 7 ページにわたり詳しい²。鉄の暴風で肉片になる住民、腕や足がなく腸の出た兵士を看護するひめゆり部隊、ガマ（洞窟）の集団自決などが描かれている。鉄血勤皇隊による自爆攻撃、学童 700 人以上が死んだ対馬丸事件なども含め、住民や子どもの被害が詳しく伝わる一方、日本軍は本土決戦のための時間稼ぎが目的で、住民を保護しなかった点も指摘されている。ただ、原爆の投下は簡潔な描写にとどまっている。

加害の面も多く取り上げている。南京事件（下図左参照）は比較的詳しくカラーで描かれ³、他のシリーズではほとんど出てこない三光作戦（下図右参照）⁴、シンガポールの華僑虐殺⁵、バターン死の行進にも言及される⁶。従軍慰安婦については、その用語は使われな



いが「日本本土、中国、朝鮮や東南アジアの各地で兵士たちの世話をするため、若い女性が集められました。」と間接的に説明している⁷。また「おうちの方へ」と題した巻末の文章では、子どもらに平和の重みをわからせるため「中国に対する加害の事実をしっかりと見つめさせましょう。」とも指摘している⁸。ただ、731部隊については言及がない。

また、戦争への批判的視点と平和を志向する観点が明示的。猫が「戦争になるとばく大なお金がかかるし、多くの兵士が死ぬだろうに…」とつぶやいたり⁹、朝鮮半島や中国への支配を強める文脈では「どの民族も…自立する権利がある…」「日本も、朝鮮や台湾の支配をやめて、小さな平和国家として生きるべき…」と市民同士で会話したり¹⁰、上海で書店を開き日中友好も深めた内

山完造が魯迅と「中国人と日本人がおたがいに理解し合える日が、きっといつかやってくると思います。」と会話したり¹¹、している。新憲法制定の場面では「第九条は、素晴らしい。」「世界にほこるべき『平和憲法』だね!」と市民が語っている¹²。

市民目線の描写が多く、逆に政府に対しては距離を置く傾向もみえる。たとえば女工の劣悪な環境や女性の選挙権獲得の活動などが詳述される一方¹³、戦後、被災地を行幸する昭和天皇については「あ、そう。」とそっけなく会話する場面を描き¹⁴、戦争の最高責任者に対する批判的な含意が読み取れる。



2 『まんが 日本の歴史』(大月書店、1988年～)

このシリーズは、人物を中心にストーリー性を重視する編集なので、教科書のような網羅的な情報は十分でない。しかし戦争の本質を理解し平和を志向する上で不可欠の、加害と被害の両面における実態が詳述される。1988年から出され12巻構成。内容は戦後の高

度成長期までで、その後の続編はない。

11 巻の第 3 話では、沖縄戦から戦後の米軍統治までを連続して説明し、ほとんど家族全員を殺された一女性を主人公に、住民が受けた理不尽な被害を詳しく伝える。対馬丸事件は 6 ページにわたり、暗い海で死んでいった 700 人以上の子どもらの恐怖を描いている¹⁵。住民をガマから追い出したり泣く子どもを殺したりする日本兵の場面、集団自決を図ったが手榴弾が不発で助かった場面など迫真の描写が続く。戦後の米軍統治についても、ジープにひき殺された少女の事件などに言及し、終わらない沖縄の苦悩を伝える。12 巻では横浜で米軍機が墜落して母子 3 人が死亡した事件も詳述される¹⁶。

原爆投下については、被爆現場は直接的には描かれないが、爆発の瞬間、庶民の日常の暮らしぶりが白く照らされる場面で話しは終わっており、むしろ次の瞬間の阿鼻叫喚を脳裏で想像しやすい¹⁷。また原爆投下に至る米国の権謀術数が詳しく説明され、その中で日本政府が当初、ポツダム宣言を黙殺していなければ原爆投下やソ連参戦は避けられた可能性も示唆される¹⁸。

平頂山事件は他シリーズでは出てこないが、本書では 8 ページにわたり詳述する（下図参照）¹⁹。中国でゲリラ兵に手を焼いた日本軍が 3000 人とも言われる村人を機銃で掃射し、石油をかけ焼く場面が描かれている。



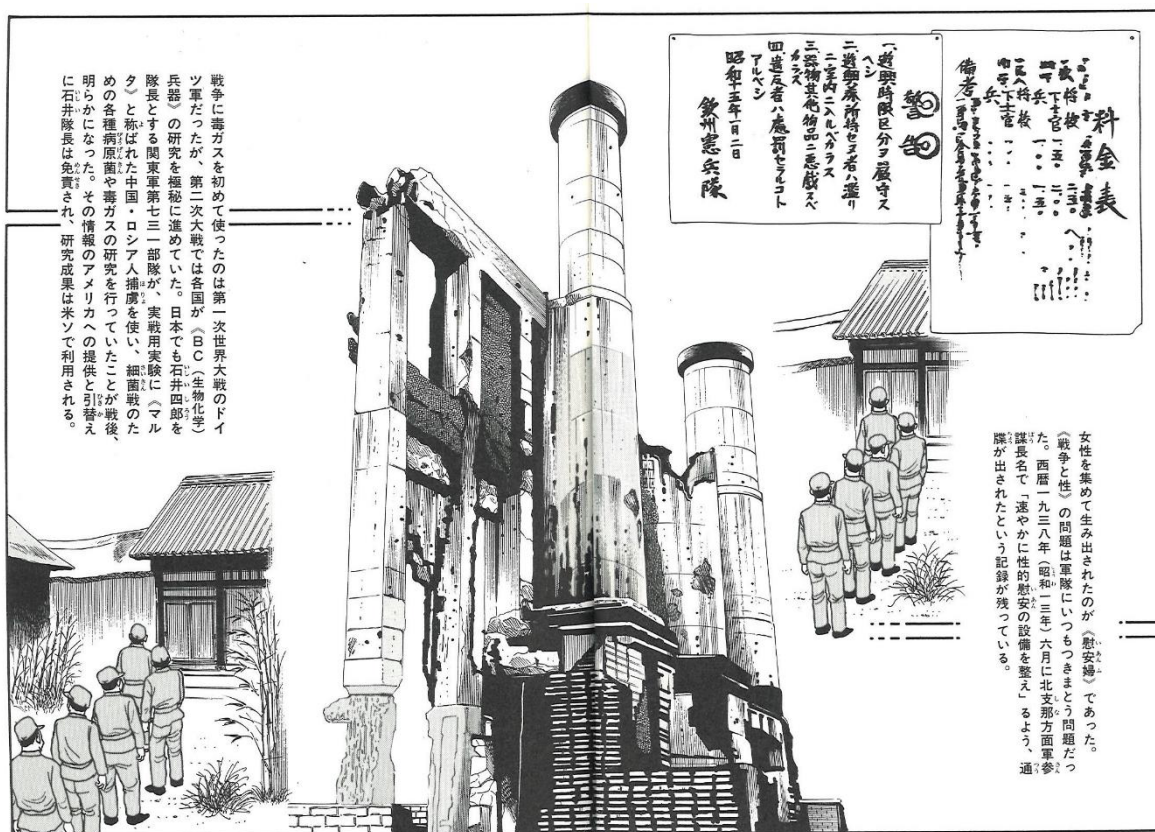
また 11 巻の第 1 話では、困窮する庶民を代弁しようと代議士になり、治安維持法や中国出兵などにも反対、暴漢に殺された山本宣治の半生を紹介している²⁰。

本書は『少年少女〜』などと違い、包括的な学習には適さないし、新しい時代の情報もないのであるが、日本の加害性に対する問題意識は、同様のシリーズの中で最も高い。あわせて沖縄戦や原爆の惨劇、戦後の米軍による被害も詳しいため、加害と被害の両者のバランスが高い次元で取れている。

日本軍の加害といっても、見方を変えれば中国人・アジア人の被害であるから、そこに注目する視点というのは、日本人かアジアの人かに関係なく、ひとしく庶民の目線に立つ発想である。戦争の本質は、国家権力が無辜の庶民に強要する不条理にあるとするなら、大月書店版はその本質を理解する上で好適な内容と言える。

石ノ森章太郎の描く『マンガ 日本の歴史』は全 48 巻として 1989 年から刊行が始まり、追加する形で明治から昭和の高度成長時代までを扱う「現代篇」7 巻が 1993 年から出された。1997 年からは文庫版になり、「現代篇」は全 55 巻の中の 49～55 巻として今も刊行中（出版社は当時の中央公論社から中央公論新社に変更）。日本史の学習まんがシリーズでは最も巻数が多く文章も多いので、中・高生以上向け。緻密な劇画調の絵は見ごたえがある。内容としては、政府レベルでのやり取りや内情は詳しいものの、逆に民衆の状況はあまり描かれていない。また加害の面について十分な説明はあるが、逆に被害の面は少ない。その結果、情報量が多いものの、全体にバランスを欠く感がある。

加害の面では、三光作戦、シンガポールの華僑の大量処刑、パターン死の行進、植民地労働者の徴用が説明され、南京陥落のページでは殺戮の絵はないものの「この《南京大虐殺》については、組織的虐殺か否かについての見解はわかれているが、日本軍の手によって《残忍な死》が加えられた事実は動かない。」と明記している²¹。また、従軍慰安婦と 731 部隊を直接的に取り上げているのは石ノ森版のみである（下図参照）。「女性を集めて生み出されたのが《慰安婦》であった。《戦争と性》の問題は軍隊にいつもつきまとう問題だった。西暦一九三八年（昭和十三年）六月に北支那方面軍参謀長名で『速やかに性的慰安の設備を整え』るよう、通牒が出されたという記録が残っている。」「…石井四郎を隊長とする関東軍第七三一部隊が、実戦用実験に《マルタ》と称された中国・ロシア人捕虜を使い、細菌戦のための各種病原菌や毒ガスの研究を行っていたことが戦後、明らかになった。そ



の情報のアメリカへの提供と引替えに石井隊長は免責され、研究成果は米ソで利用される。」と詳しく説明している²²。

民衆の被害の面では、定食屋の主人と新聞記者がたびたび登場し、厭戦の本音や窮状の怨嗟を語るが、東京大空襲や沖縄戦、原爆などはごく簡単にしか触れられていない。

政府と軍部内部の複雑な思惑は詳述され、たとえば第2次近衛内閣以降、太平洋戦争開戦にいたる間の緊張感あるいきさつは36ページにわたり²³、またポツダム宣言受諾をめぐる天皇・軍部・政府による議論の紛糾も9ページに及び説明されている²⁴。

4 『まんがで学習 日本の歴史』（成美堂出版、2002年～）

2002年に初版が出て、2014年に5巻のみ増補改訂したが、現在は絶版。石ノ森版とは対照的に、全5巻と最もコンパクトな構成だが、その割には情報量は少なくない。絵のコマが小さめで、説明文は多め、さらに欄外に注記があるためだ。情報の質としては一定のバランスがあり、標準的な内容。戦争による加害と被害の面も一定の基本的な視点は確保されている。

加害の面では、南京陥落のページで簡略ながら「南京戦では多数の一般人が殺害された。太平洋戦争後の東京裁判でその多くが日本軍によるぎゃく殺であるとされた。」と説明し



²⁵、死体の散乱する絵が載っている。また大東亜共栄圏について「東南アジアの各植民地を欧米から解放するという名目で日本軍は各地に進軍した。しかし日本の戦争のために強制連行などをくりかえすうち、日本は反感をもたれるようになっていった。」と説明し、「男も女も徴用する——！！」と日本軍が叫んでいる絵と強制労働の絵が載っている²⁶。

修羅場の沖縄戦として、ひめゆり部隊、男子中学生の突撃、ガマの集団自決などの住民被害が描かれるのとあわせて、日本軍が住民を殺した事実にも言及している（左図参照）²⁷。ただ原爆については記述は簡潔。

全体を通して平凡な家族が主人公的に登場し、「…どうして戦争に行くのにみんな喜んでいの？」「戦争はいやだね～」「だめよ、…非国民だと思われるよ！！」などと話し²⁸、戦争と貧困に翻弄された

庶民の心情が伝わる。

本文中の説明は、広島原爆で死者 14 万人以上、長崎原爆で同 7 万人以上、満州事変から 15 年にわたった戦争で日本国民の犠牲 300 万人以上などと適宜、標準的な説明がある一方、欄外で興味深い指摘もしている。たとえば東京裁判に関して、裁判所内のトイレは欧米人用と日本人用に分けられていたというエピソードを紹介し、東京裁判の持つ差別的な性質を示唆している²⁹。

5『日本の歴史 きの中のあしたは…』（朝日学生新聞社、2010 年～）

教科書的な網羅型の編集で、かつ 7 巻構成なので、全体像をコンパクトに知ることができる。趣旨は成美堂出版のシリーズと似ているが、絵のコマや字が大きいので、成美堂出版よりも情報量は少なく、小学校低学年でも読みやすい。被害と加害のバランスや反戦平和の志向性は一定程度示されている。

沖縄戦のシーンはひめゆり学徒隊と戦艦大和の沈没しか言及がないが、「軍の足手まといになるな」「日本人なら死を選べ」と命じる日本軍兵士の絵があり「集団で自殺したり避難していた場所から日本軍に追い出されて死んだ住民も多かった」と記述する³⁰。原爆投下は簡潔だが、ソ連軍侵攻による満州の被害にも言及している。

南京事件は、遺体が多数散乱する絵の欄外に「日本軍は…捕虜のほか、女性や子どもを



ふくむ多くの中国人の命をうばった。これを南京事件という。」と明記している³¹。各章の終わりに歴史用語の書き取り練習のページがついており、そこでも「南京事件」の用語を載せている³²。他の日本軍の加害の実態は言及がない。

このシリーズでは、現代の少年と少女がタイムスリップのような形で過去の歴史を追体験する構成で話が進むが、随所で率直な感想をつぶやく。たとえば中国に対する二十一か条要求の場面では「…戦争のどさくさに（日本は）自分勝手な要求をした気がするなあ」と（左図参照）³³、太平洋戦争末期の場面では「勝ち目のない戦争をいつまで続けるのかな」「国民だっていやになっているはずー」などと指摘するので³⁴、読者は戦争を批判する観点を醸成しやすい。

6 『学研まんが NEW 日本の歴史』（学研プラス、2012 年～）

学研版の学習まんがは 1982 年から刊行され、17 巻＋別巻 1 巻のシリーズがあったが、今は絶版。2012 年から内容を一新した別シリーズとして『学研まんが NEW 日本の歴史』が、12 巻＋別巻 2 巻で刊行されている。



『NEW～』はオールカラーで、絵柄もゲームに出てくるような現代的なタッチ。内容は特定の人物に焦点をあてて、ストーリー性を重視している。平塚らいてうと芥川龍之介、吉田茂、本田宗一郎などが生き生きと描かれている。苦悩する若き昭和天皇も載っているが、画風が今風すぎて、イメージの違和感は禁じえない。子どもからすれば『NEW～』はとっつきやすいが、知識の習得という点では限定的だ。巻数が減ったうえ、特定の人物を詳しく描くため、それ以外の面が手薄になり、歴史の全体像を知るのは難しくなる。

南京虐殺に言及はあるが、南京事件、南京虐殺という用語はなく、殺害場面の絵もなく、説明文として「南京では日本軍がおおぜいの一般住民を殺害したといわれ、のちに日中間の大きな問題となる。（傍点筆者）」とだけ記している³⁵。伝聞の形だから、真偽は不明という含意が出る。確かに被害者数については諸説あるものの、一般市民

の大量殺害という事実自体は確定しているのだから、伝聞型の記述は適切でない。他に加害性の面は言及されていない。

被害の面は東京大空襲が詳しく描かれ、昭和天皇が呆然と現場を視察する場面はある（上図参照）³⁶。だが、沖縄戦は簡単な説明にとどまり、集団自決にふれてはいるものの、住民被害の惨状や住民を守らなかった日本軍の観点などはない³⁷。原爆投下も、きのこ雲の絵は大きいですが、破壊の実態を詳しく伝える内容はない。

概して反戦平和を明示的に提起する部分はあまりなく、逆に昭和天皇を中心にすえた場面が多いため、むしろ戦争を遂行する側の苦悩のほう伝わってしまう。

8月15日の最終ページで「…こうして、太平洋戦争は終わった。この戦争で日本側の死者はおよそ175万人、民間人およそ80万人が亡くなった。」と表現するが³⁸、教科書などではアジア・太平洋戦争（15年戦争）として日本の死者310万人と記すのが普通であるた

め、違和感がある。

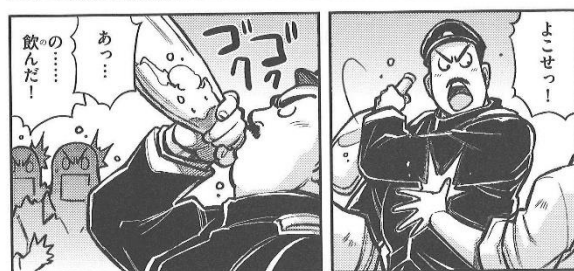
必要な情報、観点が十分でない半面、たとえばポツダム宣言の受諾については、政府は「黙殺」と発言したがメディアが「拒否」と伝え齟齬があったと説明するなど、細かい部分も載せてあり³⁹、全体のバランスを欠く印象をうける。

7 『小学館版学習まんが はじめての日本の歴史』（小学館、2015 年～）

低年齢層にも読みやすくと、『少年少女～』とは別に、新しく 2015 年から刊行された。内容を絞り 14 巻+別巻 1 巻の構成。小ぶりのソフトカバーで手に取りやすい。絵のコマも大きい。しかし、同じ小学館版であるが、『少年少女～』と比べると、『はじめての～』は内容の質が低い。加害性の観点が弱く、日本を正当化する印象が生じうる点、全体にバランスが悪い点などが目に付く。

たとえば南京虐殺をめぐる表現。『少年少女～』ではリアルな虐殺場面とともに、説明文には、「南京で虐殺された中国人は、戦後の東京裁判の記録によると十一万人以上にもなります。その中には、多くの市民もいました。（傍点筆者）」とある一方⁴⁰、『はじめての～』では絵がぼかされているうえ、説明文で「南京を占領した日本軍が民間の中国人を殺したといわれていますが、その確かな数字はわかりません。（傍点筆者）」と伝聞型の表記に変わり⁴¹、事実関係があいまいにされている。

さらに、日本が東南アジアに戦線を拡大する場面では、『少年少女～』では南方の資源奪



取が目的とわかるが、『はじめての～』では日本兵同士が「おお、ビルマの人たちもうれしそうだな。」「日本の戦いは、欧米列強のアジア侵略からアジアの人々を解放するのが目的の『正義の戦い』なんだ。」と会話する絵があり、そのコマの説明文で「これが、日本が戦争をする理由でした。」と記している⁴²。アジアの解放という面だけを理由として断定するのは妥当性を欠く。

また、関東大震災の際の朝鮮人虐殺事件では、『はじめての～』は虐殺を止めた警察署長の逸話も載せている。「朝鮮人も君たちと同じ被災者なんだ！それでも連れて行くというなら、この大川を殺してから行け！」と署長が大見得を切っている（左図参照）⁴³。この逸話は例外であるのに、これをことさら扱うことで、

よい日本人もいたという正当化のニュアンスが出る。

本書はこのように情報の質の点で疑問が生じる他、全体の情報量としてのバランスの点でも理解しにくい面がある。たとえばインパール作戦についてだけで5ページを割いているが⁴⁴、なぜここだけ詳細なのかわかりにくい。他方、新憲法制定の場面では第9条についてまったく言及がない⁴⁵。また、バターン死の行進を取り上げているのは、日本軍の加害性という点では有意義であるものの⁴⁶、逆に上述のように南京虐殺はぼかして書いてあり、一貫性がわかりにくい。

8 『角川まんが学習シリーズ 日本の歴史』（KADOKAWA、2015年～）

小ぶりのソフトカバーで、全15巻と、『はじめての～』に似ている。情報の質は標準的な内容だが、国際的な観点が豊富なので、日本とアジア、欧米の関係性を元に戦争の経緯を理解しやすい。ただ、日本の戦争による被害と加害のバランスでは不十分な印象が残る。巻ごとにまんが作家が違い、それぞれの現代風の絵柄が目をはく。

被害の面では、原爆について8ページを割いてその惨状を詳細に伝えている（下図参照）⁴⁷。他のシリーズでは意外に原爆の描写は少ないので、この点は出色だが、逆に沖縄戦の説明があまりに簡潔すぎる⁴⁸。

加害の面は皇民化教育や強制労働、徴兵、徴用、徴発などの一般的な説明と⁴⁹、南京事件



程度。南京事件は殺戮の場面一コマの絵に「日本軍は南京入城の際中国兵だけでなく捕虜や一般市民を大勢殺したとされる。」と説明し、さらに欄外で「殺害された人数については諸説あり、事件そのものがなかったという証言もある。」と追記している⁵⁰。「～とされる」と断定表現を避け、事件自体を否定する証言もあるとわざわざ注記する点に、南京事件の加害性をあいまい化する意図があるように見える。

他方、民族自決の原則が無視され、朝鮮や中国、インドの民衆が反発する経緯や、日本政府が「なんと言われようと中国の利権は日本のものだ！」と叫ぶ場面⁵¹、国際取り決めに破っても「知ったことか！シベリア出兵開始ー！！」と意気上がる場面など⁵²、利権をむさぼろうとする日本に対する批判的視点はわかりやすい。

また、美濃部達吉・貴族院議員が孤立化す

る日本に対し「…おろかな」とつぶやく場面⁵³、国民学校の女教師が、お国のために闘って命を落とせと子どもに教えるのをためらう場面など⁵⁴、戦争を否定する観点は一定程度、示されている。

9 『集英社版学習まんが 日本の歴史』（集英社、2016 年～）

20 巻＋1 別巻で構成、近現代史を重点化し、平成の直近まで扱っている。絵のコマが大きいので見やすいが、教科書的な網羅式の編集ではなく、ストーリー性を重視する選択的な傾向があり、情報の内容に濃淡がある。戦争に関しても、被害と加害の実態や、戦争忌避の観点を理解する点などが十分ではない。

昭和恐慌における金輸出の解禁や緊縮財政、高橋是清の財政などを取り上げるが、多くのページにわたって説いているものの低年齢層にはわかりにくい。逆に、普通選挙法の実施や治安維持法の制定など当時の状況で重要な項目がほとんど説明されていない。

また、浜口雄幸首相の銃撃、血の血盟団事件、5・15 事件など右翼の暗殺・クーデターに詳しくふれ（下図参照）⁵⁵、とくに 2・26 事件は 1 章をあて、34 ページにわたり経緯を描写する⁵⁶。読み物的には興味深いが、他の情報は伝えにくくなるし、とくにテロや暗殺を学習まんがで重視する必然性もわかりにくい。



当時の平均的な庶民を表す家族が、他社シリーズ同様に登場するが、集英社版ではその人物から戦争を嫌う本音の部分がほとんど語られていない。むしろ満州国や関東軍を肯定する言動や、戦時下の窮乏生活をけなげに耐える様子、召集令状を毅然と受け取る場面などが強調され、全体に、反戦平和の明示的な観点・メッセージを読み取りにくい。

戦争終結をめぐる天皇・軍部・政府・米国民間の経緯と対立は詳しく説明され、緊迫した事情を理解しやすいが、他方住民の苦境や被害はあまり詳しくない。原爆については大きな雲の絵はあるものの、被害者数などの説明はない⁵⁷。沖縄戦もガマの住民自決、鉄血勤皇隊、ひめゆり隊などは言及しつつも、日本政府が沖縄を捨石にした点や日本軍が住民を保護しなかった点などはふれていない⁵⁸。南京事件については「このとき日本軍は多くのほりよや一般住民を殺害しました（南京事件）。」とは記すものの、その絵はな

く、煙か霧のようなコマが載っているのみ⁵⁹。玉音放送のシーンで17巻は終わるが、アジア・太平洋戦争によってどれくらいの被害者が出たのかなどの説明はない⁶⁰。

10 『角川まんが学習シリーズ 日本の歴史 別巻 よくわかる近現代史』（KADOKAWA、2018年～）

上述8の15巻シリーズに別巻として追加する形で、近現代史に特化した3巻のセット。第一次世界大戦以降、平成時代のトランプ大統領の就任までを描く。情報量が多く、国際的な視点をはじめ多面的でかつバランスが取れているため、日本の近現代史を学ぶ学習まんがとして、一定の完成度がある。

戦争をめぐる問題についても、踏み込んだ詳しい記述があり、平和や国家、国際関係の本質を洞察する観点も提起される。ただ、戦争における日本による加害の実態については手薄な感がある。

従来の学習まんがにはほとんど出てこないが、重要な意味を持つ記述が多くある。たとえば以下。

- ・関東大震災の騒乱で起きた、アナーキスト大杉栄らを殺した甘粕事件⁶¹。
- ・リットン報告書には日本に有利な内容もあり、松岡代表は国際連盟脱退を躊躇した点⁶²。
- ・ベルリンオリンピックで日本代表としてメダルを取った朝鮮出身選手の苦悩⁶³。
- ・戦争に反対したため衆議院から除名された斎藤隆夫の演説⁶⁴。
- ・捕虜になるのを禁じた戦陣訓の規定が軍・民に広がり、多くのむだ死にを招いた点⁶⁵。
- ・「神風特別攻撃隊」を「かみかぜ」でなく「しんぷう」と正しく振り仮名をつけている点⁶⁶。

また、読者に、単に情報の取得だけでなく、戦争や平和について考察を促がす工夫がある。ドイツのトラウトマン大使による日中戦争の仲介⁶⁷、日米諒解案による対米関係の維持⁶⁸、近衛文麿による天皇への講和の提案⁶⁹、ポツダム宣言の即時受諾などの場面で⁷⁰、いずれも政策決定者が英断をすれば開戦や戦災を避けられた「歴史のI F」を考えやすい。

出色なのは、戦争と平和の本質を洞察できる観点だ。本書では架空の外交官一家が主人公であるが、この外交官が要所で核心的な問題提起を示す。欧米列強に追いつき、アジアで覇権を狙う日本について、『力』とはなんとやっかいなものか」と語らせ、国際政治におけるパワーポリティクスの本質に注目させている⁷¹。また、この元外交官は戦争についてこう語る：「おごった列強は弱い国を下に見てあらゆるものをむさぼりつつ…日本も同じことをした…そして後のち…ツケを支払うことになるんだ…若い者や弱い者（が）」、「われらは『国』を信じて…戦っていた バカだったよ」（下図参照）⁷²。ここでは、戦争の本質的要因として、国家の利己的な国益偏重と、その国家にだまされた国民の軽率が指摘されている。そして「本当に『国のことを考える』——ということは『自分の国のことだけ考えちゃいかん』ということなんじゃ」と、相互依存の協調外交の重要性を説いてい



る⁷³。

この元外交官は朝鮮戦争のくだりでは、朝鮮特需の後ろめたさとともに、混乱の元はそもそも日本の植民地化にあると指摘したり⁷⁴、村山談話を「評価するよ」と語ったり⁷⁵、日本の戦争責任を謙虚にとらえている。

他方、日本軍の加害に関する内容は詳しくない。南京事件は市民や捕虜の殺害を事実として記述するが、絵は小さく、被害者数は未確定としている⁷⁶。日本の支配地域における皇民化政策や現地住民の徴兵は書いてあるが、それ以外の加害の実態は言及がない。3巻の日韓基本条約のところで従軍慰安婦問題が出るが⁷⁷、2巻の戦時中のページでは取り上げられていないので唐突であり整合性に欠けている。

東京大空襲、沖縄戦、原爆などの被害の面はリアルに惨状が描写されている。満州開拓民の被害や残留孤児、シベリア抑留、特攻兵の悲哀も言及され、被害の実態はある程度伝わる。ただ、沖縄戦において日本政府・軍部は沖縄を捨石にし住民にも死を強いた側面は明示されていない⁷⁸。

おわりに：各シリーズの相違と全体的傾向

このように 10 種の日本史学習まんがにおける、アジア・太平洋戦争に関する記述を概観すると、それぞれの個性や違いと同時に、一定の傾向も見えてくる。

それぞれの相違点については、情報量、教科書的な網羅性、加害の面の観点、被害の面の観点、平和の志向性・洞察、読者の水準という項目で分けると、表のように各シリーズの個性が明快になる。多くの項目で水準の高いシリーズは、『小学館版学習まんが 少年少女日本の歴史』（小学館、1981 年～）と、

『角川まんが学習シリーズ 日本の歴史別巻 よくわかる近現代史』（KADOKAWA、2018 年～）と言えるだろう。『少年少女～』は各項目ともバランスよく充実しており、定番として長く読まれるだけの内容がある。児玉幸多・監修者が民衆史を専門にしているため、全般に市民目線の歴史観がみえる。『よくわかる近現代史』もまとまっており、とくに国際関係や平和の本質を洞察できる観点は他にない長所である。ただ、目線は『少年少女～』とは対照的にむしろ国家レベル・政府レベルにあり、また日本軍の加害の面については内容がうすい。子どもらに一般的に薦めるなら、この両者を基本に、『まんが 日本の歴史』（大月書店、1988 年～）と、『マンガ 日本の歴史』（中央公論社、1989 年～）で、補いつつ学ぶ形が望ましいだろう。

10 シリーズを概観して見える全体的傾向は、古い学習まんがと新しい学習まんがとの、時系列的变化である。表では 1980 年代の出版から最近の出版まで順に並べているが、明らかな点は、時代が下るにつれ、加害の面の記載が減ってきている傾向である。同様に、平和の志向性・洞察の観点も少なくなっている。つまり、2010 年代から出版されている学習まんがにおいては、アジア・太平洋戦争における日本の加害という面があまり載らなくなり、合わせて平和を求める姿勢も以前ほど明示されなくなっているという実態である。なぜそうした傾向が生じたのか。一つには、教科書にも顕著に反映している歴史修正主義の影響や、また一般的な戦争体験の風化という流れもあるのだろう。加えて、監修者や出版社の識見・能力という技術的問題もありうる⁷⁹。

いずれにしても、最近の学習まんがにはこうした全体的傾向があり、そして学習まんがは学校や図書館で容易に広範に読まれている以上、そうした傾向が児童・生徒らに対して一定の影響を及ぼすのは否めない。なので、冒頭で提起した、大学生ら若い世代が戦争における日本の加害性を知らない実態は、学習まんがと一定の関連性はあるかもしれない。

戦争にせよなににせよ、およそ社会の事象は単純化すれば「原因」→「実態」→「対応」の 3 段階の枠組みで考察できよう。そこではまずもって「実態」について十全の把握が必須となる。「実態」が不十分にしか理解されていなければ、そこに至る「原因」に対する考察も比例して不十分にとどまる。また、「実態」を受けて「対応」を考えるにしても、実態を中途半端にしかとらえていなければ、実態に即した実効ある「対応」にはつながってこない。

それゆえ、戦争を学ぶ際もまず「実態」を十分に把握せねばならない。しかし上述したように、学習まんがにおいて戦争における日本の加害の面に関する内容が希薄になっているので、こうした傾向は戦争の「実態」を知るという点で大きな妨げになっていると言える。戦争における加害と被害は不即不離の関係であり、加害も被害も両面、バランスよく知られねばならない。とくに、加害の面の認識が欠落している日本の現状は、日本とアジア諸国との関係において負の影響を及ぼしうる。中国・朝鮮半島と日本の戦後の関係が常に戦争責任・歴史認識の問題でギクシャクし、日韓関係が最近、戦後最悪と言われるほどに後退しているのは、根底にこの問題があるからと言えるだろう。

日本文学を研究する韓国の朴裕河・世宗大学教授は「被害者の示すべき度量と、加害者の身につけるべき慎みが出会うとき、はじめて和解は可能になるはずである」と指摘した⁸⁰。韓国と日本が安定した互惠の関係をつくるには、韓国など戦争の被害を受けた諸国が加害者の日本をゆるす「度量」が必要という指摘であるが、その前提には加害者の側の日本に「慎み」がなければならない。この「慎み」は、日本人自身が自分たちのした加害の「実態」を知らねば、当然もちにくい。最近、日本政府はじめ日本人の多くはこの加害性の認識が希薄になった結果、「慎み」を欠く言動や態度が陰に陽にあらわれ、それゆえ韓国などの被害者側は「度量」を示せるような心理にはなりにくく、結果、過去の戦争被害に拘泥し続けるというのが今の構造であろう。日本はこの状況で種々、主張・反論を行っても、「慎み」を欠いたままいくら正論や筋論を主張しても相手には響かず、こう着状態の溝が深まるだけである。こうした構造を改善するには、まず日本側が加害の「実態」を十分に認識し、誠実な謙虚な姿勢、つまり「慎み」を示すことが必要であろう。

学習まんがは教科書と違って検定や採択の規制はないので、出版社、監修者、教員、図書館職員、保護者らの判断でより望ましいシリーズを発刊、購入、所蔵、推薦できる。次世代がバランスのある健全な歴史観と知識を得られるよう、また日本がアジアの近隣国と安定した互惠関係を築いていくためにも、良い学習まんがを選びたいと考える。

¹ たとえば、従軍慰安婦の問題は、1997年には7社すべての中学歴史教科書で記載があったが、その後減っていき、2012年には記載する教科書はなくなった。2016年に唯一「学び舎」が従軍慰安問題を載せている。

² 児玉幸多監修『小学館版学習まんが 少年少女日本の歴史』（第20巻 アジアと太平洋の戦い）改訂・増補版、小学館、1998年、128～134頁。

³ 同上、52～53頁。

⁴ 同上、58頁。

⁵ 同上、81頁。

⁶ 同上、84頁。

⁷ 同上、112頁。

⁸ 同上、157頁。

⁹ 同上、（第19巻 戦争への道）、34頁。

¹⁰ 同上、47頁。

¹¹ 同上、（第20巻 アジアと太平洋の戦い）、28頁。

¹² 同上、（第21巻 現代の日本）、36頁。

¹³ 同上、（第19巻 戦争への道）、95～107頁。

¹⁴ 同上、（第21巻 現代の日本）、27～28頁。また敗戦直後の食糧メーデーの場面では「詔書 國体はゴジされたぞ 朕はタラフク食ってるぞ ナンジ人民飢えて死ね ギョメイギョジ」というプラカードも描いてある（同29頁）。

¹⁵ 加藤文三、黒羽清隆、吉村徳蔵、鈴木亮編集『まんが 日本の歴史』（11 15年もつづいた日本の戦争）、大月書店、1988年、87～92頁。

¹⁶ 同上、（12 不死鳥のように）、75～112頁。

¹⁷ 同上、（11 15年もつづいた日本の戦争）、151頁。

¹⁸ 同上、126～146頁。

¹⁹ 同上、69～76頁。

²⁰ 同上、5～40頁。

²¹ 石ノ森章太郎『マンガ 日本の歴史』（53 日中戦争・太平洋戦争）、中央公論新社、1999年、48頁。

²² 同上、20～21頁。

-
- ²³ 同上、128～163 頁。
²⁴ 同上、185～193 頁。
²⁵ 小和田哲男監修『まんがで学習 日本の歴史』（⑤ 明治時代～平成時代）増補改訂版、成美堂出版、2014 年、126 頁。
²⁶ 同上、140 頁。
²⁷ 同上、152 頁。
²⁸ 同上、143、145 頁。
²⁹ 同上、167 頁。
³⁰ つばいこう『日本の歴史 きのうのあしたは…』（第 7 巻 世界の中の日本 明治時代・後期～平成時代）、朝日学生新聞社、2011 年、205～206 頁。
³¹ 同上、176 頁。
³² 同上、217 頁。
³³ 同上、116 頁。
³⁴ 同上、200 頁。
³⁵ 大石学総監修『学研まんが NEW 日本の歴史』（十一 大正デモクラシーと戦争への道）、学研プラス、2012 年、85 頁。
³⁶ 同上、102 頁。
³⁷ 同上、104 頁。
³⁸ 同上、112 頁。
³⁹ 同上、105 頁。
⁴⁰ 児玉幸多監修『小学館版学習まんが 少年少女日本の歴史』（第 20 巻 アジアと太平洋の戦い）、53 頁。
⁴¹ 山本博文総監修・季武嘉也監修『小学館版学習まんが はじめての日本の歴史』（13 絶えない戦争）、小学館、2016 年、115 頁。
⁴² 同上、(14 新しい日本)、27 頁。
⁴³ 同上、(13 絶えない戦争)、57 頁。
⁴⁴ 同上、(14 新しい日本)、47～51 頁。
⁴⁵ 同上、71 頁。
⁴⁶ 同上、22～24 頁。
⁴⁷ 山本博文監修『角川まんが学習シリーズ 日本の歴史』（15 戦争、そして現代へ）、KADOKAWA、2015 年、69～76 頁。
⁴⁸ 同上、62～63 頁。
⁴⁹ 同上、51～52 頁。
⁵⁰ 同上、(14 大正デモクラシー)、207 頁。
⁵¹ 同上、62 頁。
⁵² 同上、84 頁。
⁵³ 同上、185 頁。
⁵⁴ 同上、(15 戦争、そして現代へ)、31 頁。
⁵⁵ 古川隆久監修『集英社版学習まんが 日本の歴史』（16 恐慌の時代と戦争への道）、集英社、2016 年、101 頁。
⁵⁶ 同上、139～172 頁。
⁵⁷ 同上、(17 第二次世界大戦)、164～165 頁。
⁵⁸ 同上、154～155 頁。
⁵⁹ 同上、38 頁。
⁶⁰ 同上、171 頁。
⁶¹ 山本博文監修『角川まんが学習シリーズ 日本の歴史別巻 よくわかる近現代史』（1 大正から激動の昭和へ）、KADOKAWA、2018 年、95 頁。
⁶² 同上、186～188 頁。
⁶³ 同上、(2 戦中・戦後の日本)、49 頁。
⁶⁴ 同上、65～66 頁。
⁶⁵ 同上、126～127 頁。
⁶⁶ 同上、143 頁。
⁶⁷ 同上、32～34 頁。
⁶⁸ 同上、81～86 頁。
⁶⁹ 同上、148 頁。
⁷⁰ 同上、155 頁。
⁷¹ 同上、(1 大正から激動の昭和へ)、54 頁。

⁷² 同上、(3 現代日本と世界)、147～148 頁。

⁷³ 同上、147 頁。

⁷⁴ 同上、(2 戦中・戦後の日本)、201 頁。

⁷⁵ 同上、(3 現代日本と世界)、164～165 頁。

⁷⁶ 同上、(2 戦中・戦後の日本)、30 頁。

⁷⁷ 同上、(3 現代日本と世界)、44 頁。

⁷⁸ 同上、(2 戦中・戦後の日本)、152～153 頁。

⁷⁹ ある出版社の担当者は筆者とのインタビューにおいて、企画・編集・出版の過程で十分な検討ができず、稚拙な内容になったことを認めていた。ただ、学習まんがの内容について外部からの抗議や恫喝などはなく、そうした直接的な外部圧力で内容が変わったわけではないという。

⁸⁰ 朴裕河『和解のために 教科書・慰安婦・靖国・独島』平凡社、2011 年、291 頁。

日本史の学習まんが10シリーズにおける戦争と平和をめぐる記述の比較(◎は強く該当、○はある程度該当)

	情報量	教科書的な網羅性	加害の面の観点	被害の面の観点	平和の志向性・洞察	読者の水準
『小学館版学習まんが 少女少女日本の歴史』 (小学館、1981年～)	○	◎	○	○	○	小・中・高生
『まんが 日本の歴史』 (大月書店、1988年～)			◎	◎	◎	小・中・高生
『マンガ 日本の歴史』 (中央公論社、1989年～)	◎		◎		○	中・高生
『まんがで学習 日本の歴史』 (成美堂出版、2002年～)		○		○	○	小・中・高生
『日本の歴史 きんのうのあしたは…』 (朝日学生新聞社、2010年～)		○			○	小学生
『学研まんが NEW日本の歴史』 (学研プラス、2012年～)						小学生
『小学館版学習まんが はじめての日本の歴史』 (小学館、2015年～)						小学生
『角川まんが学習シリーズ 日本の歴史』 (KADOKAWA、2015年～)		○		○	○	小・中生
『集英社版学習まんが 日本の歴史』 (集英社、2016年～)	○					小・中生
『角川まんが学習シリーズ 日本の歴史 別巻 よくわかる近現代史』 (KADOKAWA、2018年～)	○	○		○	◎	小・中・高生